

2014ヨルダン研修報告書

トレーナー代表 田中 博明

2014年8月に行ったヨルダン研修報告。

内容は講義と実技の二段構成にし、第一週目にスライドと配布プリントを使用しての座学を集中させ、それ以後は実技を中心に展開していった。

講義・実技の内容

・講義内容

- ①トレーナーの役割
- ②応急処置・アイシング講義・体験
- ③テーピング概論講義・体験
- ④マッサージ概論講義・体験

・実技内容

- ①テーピング
基本となる足首の固定テープ・関節に対する安定性を獲得するテープ・
筋肉に対するテープなど
- ②マッサージ
全身をマッサージすることを目的にその行程及び手技の習得

講義・実技のレポート

・講義について

初回でありヨルダンについてわからないことが多い中での準備であったが、実技につながるテーピング・マッサージともに内容をある程度網羅できたと認識している。特に東洋医学の範疇に含まれるマッサージ・按摩・指圧の講義ではその概念を伝えることが難しかった。講義とともに実際に我々が手を動かし、彼らに体験してもらったことは良かった。講義だけではイメージしにくいことも、身体で感じてもらえたと思っている。

・実技について

テーピング・マッサージともに一ヶ月という短期間ではどうしても身につけられることが出来るものではなく数年単位で毎日毎日積み重ねて技術を身につけるものである。その中でどれだけ伝えられるかということが懸念であった。

だがテーピング・マッサージともに一ヶ月の中で大まかな部分では我々の想像以上に進歩をしてくれたと思っている。

テーピングでは日本から運んだテーピングを使い、基本的な扱い方・手順を覚えた。最後には例題としてあげた症状に対し、使用するテープや巻き方を考え臨機応変に対応させるというところまで持っていけた。

マッサージでは身体の部分ごとに手順・手の使い方・身体の使い方を覚えた。最後には第三者を相手に時間制限のある中で全身のマッサージを行い、高評価を得るところまでいった。

課題

この一ヶ月という期間で組んだ日本でやっているトレーナーの役割を伝えられたと自負している。だが、トレーナーという仕事は一ヶ月で習得できるものではなく、継続して経験を積んでいく必要がある。そういう意味では今回の一ヶ月は始まりの一ヶ月であり、トレーナーの仕事全体から見ると伝えられたものはごく一部のみと考える。

講義においては第一週に行ったこともあり、日本側とヨルダン側の意思疎通がまだまだ十分に出来ていない時期であった。そのためお互いの知識や認識などの違いを把握仕切れていなかったためディスカッションのような意見交換が少なく、こちらが一方的に話すような時間が出来ていた。またこの時に通訳の重要性を痛感し今後の活動において通訳に求められることを考えるきっかけとなった。

第二週以降の実技においては先述の通り我々の予想以上に進歩を感じ取れた。だが細かな点においてはまだまだ不十分であり、これからの研鑽が必要であることも間違いない。限られた時間の中で我々は日本では考えられないくらいに手取り足取り物事を細かく伝えてきた。それはヨルダンで日本式のトレーナー像をわかってもらうためであり、受講してくれた彼らを通してヨルダンに根付かせるためである。

今回の講習でまず日本式のトレーナー像という大きな枠組みの第一歩を踏んだと考えているが、まだまだ枠組みも小さいもので、この枠を大きくし、さらにその枠の中に知識・技術・経験などを詰め込んでいかなければならない。

展望

この一ヶ月である程度の技術については伝えられた。だがこの技術も基本を伝えただけで過ぎず、もっと細かな技術も必要になってくる。

なによりこの基本の技術も毎日積み重ねていかなければ身に付くものでなく、一ヶ月である程度の形になったとしても、その後がなければすぐに失われてしまうものである。

技術以外の面でもトレーナー本位にならない気の配り方や、丁寧さといった相手の立場になって考えるということや相手があって初めて活かせる技術という考え方などの意識付けがもう少し出来ればさらに良かったと考えている。

一ヶ月でやろうとしたことの技術や知識といった面での内容は形になってくるころまでは伝えられた。さらに一步踏み込んだ部分での技術や相手の立場に立った物事の考え方、さらに言えばトレーナースピリッツなどでは伝えきれずに今後を持ち越すこととなった。

今回の一ヶ月でヨルダンの国民性や価値観などを少しは理解できた。この経験をもとに今後とも関係を持ち、伝えていくことが出来ればさらに日本の考えを伝えることも出来るであろうし、向こうの意図も汲み取れ、精神面や感覚といった細かい部分も含め共通理解が出来てくると考える。

ヨルダン最終日の午前中に日本人トレーナーとヨルダントレーナー達をまとめ、指揮をとって下さった皇太子オフィスコサイイニシアチブアドバイザーのカーレド・ジダン氏と今回の講習について、そして受講生たちについて話し合った。そのときに互いに一番感じていたことは『彼らの技術は始まったばかりだが、真面目に取り組む姿勢もあるし、意欲もある。これから継続して学んでいき、経験を積んでいけば良いトレーナーに育つはず』ということだった。目指すところが同じであれば、国は違えど思いは通ずると再確認できた。

我々としては是非とも今後もヨルダンとの関係を続け、向こうにこの技術を根付かせ、スポーツ選手のみならず一般の方にも役立てられるものとして協力していければと考えている。治療家として1つの職業としての立場を確立できればと思っている。

この機会に出来た人と人とのつながりを大切にし、両国の関係に貢献・協力できたらと考えている。